発達障害のある児童生徒のために　～二次障害の早期発見と予防～

発達障害のある子どもの指導や支援を考えるとき、周囲の大人による二次障害への気づきと対応が重要です。今回は、二次障害の早期発見と未然防止について紹介します。

1　二次障害とは

二次障害は元々、脳性麻痺のある人の、本来ある障害が悪化した状態や、新たに生じた別の障害に対して使用されていた用語です。発達障害が特別支援教育の対象として位置づけられると、特別支援教育や児童精神医学分野でも用いられる用語になりました。

発達障害の二次障害は、一次的な障害である発達障害の特性に対して、適切な支援がなされないか、不適切な対応がなされるために生じる情緒や行動面の問題を指して用いられています。

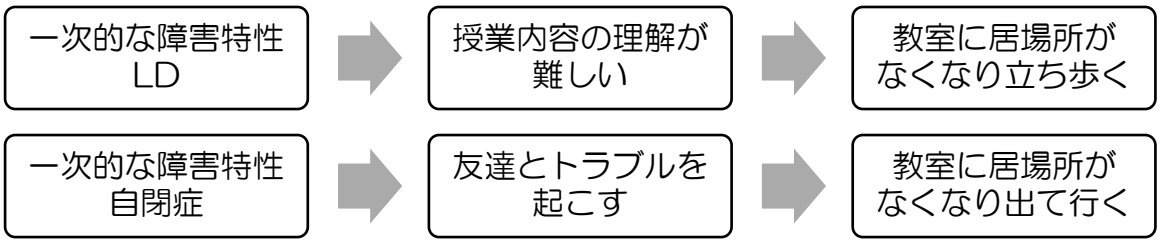
2　発達障害の二次障害の状態像

二次障害の捉えとしては、次のような場合があります。

まず、本来見られている様子や行動などが悪化する場合です。例えば、ADHD の落ち着きの無さがエスカレートする、というものです。

次に、本来の特性にはない様子や行動などが見られてくる場合です。例えば、ADHD に反抗的言動が現われる、というものです。さらには、反抗挑戦性障害、社交不安障害等の診断がつくこともあります。

また、発達障害の一次的障害である障害特性が、状況によっては、別の発達障害の行動特性としてみられる場合もあります。例えば、



このように、立ち歩いたり教室を出て行ったりする行動は、一見 ADHD の特性である多動性のようにみえますが、LD や自閉症の二次障害として出てくることもあります。

障害特性によるつまずきや失敗がくり返され、学校生活に対する苦手意識や挫折感が高まると、心のバランスを失い、精神的に不安定になり、様々な身体症状や精神症状が出てしまう等、二次障害としての不適応状態がさらに悪化してしまう場合があります。二次障害の状態を、下のような場合に分けることができます。

外在化した形		内在化した形
極端な反抗、 暴力、家出、 反社会的犯罪行為など	状態像	不安、気分の落ち込み、 強迫症状、対人恐怖、 不登校、引きこもり等
行動上の問題として、 他者に向けて表現する	特徴	情緒的問題として、 自己の内的な苦痛を生じる

これら二つは、どちらか一方だけが現われる場合もありますが、しばしば両者が共存するとされています。

３　二次障害への対応

特別支援教育における二次障害は、発達障害と不適切な対応や不十分な支援という環境要因が関わって発現するものです。医療との連携は重要ですが、未然に防止することを含めた支援に医学的診断は必須ではありません。子どもに発達障害がある可能性に気づいたら、できるだけ早くに適切な支援を開始して二次障害を未然に防止し、発現した二次障害についての改善を図ることが大切です。次は、発現した二次障害への対応を考えていきましょう。

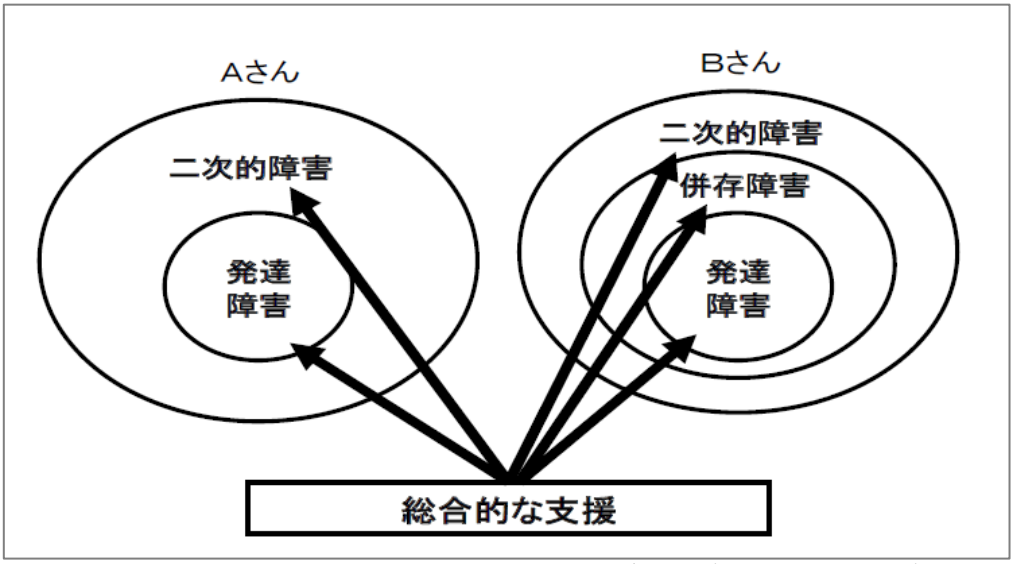
二次障害は、一次的障害との区別が難しい場合もありますが、二次障害の可能性を常に考慮し、対応することが重要です。二次障害は、適切な支援があれば比較的短時間で改善していきます。そのためには、次のような対応が大切です。

☆一次的障害による特性に応じた支援を工夫する
☆自信や意欲を失ったり自己評価が低くなったりしないように、自尊感情を高めていく

自尊感情を高めるためには、自分は大切にされている、自分は必要とされているといった、他者からの賞賛や承認、評価が影響してきます。そのため、次のようなことが大切です。

☆授業をはじめ、学校における様々な学習活動において、「わかった」「できた」という達成感や成就感を感じる経験を積むこと
☆学級集団の中で自分の役割が与えられ、その役割をきちんと果たしていると感じられること
☆取り組めていること、役割を果たしていることを、周りの人たちにきちんと認められていること

このように、二次障害への対応は、本来の特性への対応、併存する障害への対応、さらなる症状の悪化への対応という観点から、全ての症状を含めて、総合的な支援が望まれます。（下図）



文部科学省　生徒指導提要（平成 22 年3月）より

4　二次障害の予防

発達障害の二次障害に関する未然防止のための対応を考えるにあたっては、まず発達障害の特性に気づくことから始まります。特性への気づきとは、診断の有無にかかわらず、①診断の根拠となる様子や行動などの把握、②診断と関連する様子や行動などの把握、③診断とは直接関係しないように思われるが、子ども個人の特性の把握です。

次に、子どもの行動などに影響を与える環境要因にも意識を向けることが大切です。環境には、まわりの人とのかかわりによる人的環境と、居場所となる生活環境があります。

子どもが安心できる人的環境とは、子どもとの信頼関係が築けている環境です。子どもとの信頼関係を築くためには、子どもの話をたくさん聞き、子どもの考えていることを受け止める、見通しが持ててわかりやすい指示や教示を行う、否定的な対応や無理強いはしない、良い行いや小さな努力を認めるようにする等が大切です。

居場所となる生活環境とは、活動の見通しが持ちやすく、安心して取り組むことができる生活環境です。仲間意識があり、互いに認め合い支え合う友達関係、ルールが遵守され、安心感が得られる教室、学習に意欲的に取り組むことができる成就感・達成感のある学級にしていくことは、すべての子どもにとって安心できる環境になります。また、不安定になったときにクールダウンする避難場所が確保されていることが安心感につながります。

さらに、保護者との連携・協働も大切です。保護者は、我が子への期待感や気持ちの焦りから、苦手なことを無理強いしたり、注意や叱責を繰り返したり等、誤った対応が続いてしまうこともしばしばみられます。認められるよりも叱られる機会が多いほど、子どもは不安定さを増し、二次障害がさらに悪化してしまいます。適切な問題意識を持ち、適切な対応がなされることで、親子関係は安定し、子どもの状態も落ち着いてきます。学校は、子どもの目先の問題ばかりに気をとられずに、保護者の考えを十分に受け止めながら子どもの情報を共有し、適切な対応について一緒に考えていく姿勢が大切です。

最後に、医療機関等の専門機関との連携についてです。専門機関と連携することは、受け容れてくれる環境が保障されるとともに、保護者への子育て支援の役割も大きいです。学校と保護者、専門機関とが連携し、チームで子どもへの対応を考えることは、適切でないかかわりや環境づくりを抑止するためにも効果があるでしょう。保護者や教師が一人で問題を抱えることがないように、子どもの状態を常に複数の目で見ることができる体制づくりが大切です。

※二次障害は、「二次的障害」「二次的な障害」ということもあります。

＜引用・参考資料＞

〇生徒指導提要　文部科学省　平成 22 年３月
〇「発達障害と情緒障害の関連と教育的支援に関する研究―二次障害の予防的対応を考えるために―」　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　平成 24 年３月
〇二次障害の理解と対応　独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　発達障害教育推進進センター　平成 24 年収録　〈http://icedd.nise.go.jp/?page_id=1327〉〔2020 年２月 17 日取得〕
〇『DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引』　日本精神神経学会監修　医学書院　2014 年 10 月 15 日